

# 「木石、心を持たず」「人、木石にあらず」

吉野 政治

〔要旨〕 仏典では死の状態を「木石のごとし」と言い、漢籍では

「人、木石にあらず」と言う。仏典や漢籍では木石は非情のもの、譬喩である。しかし、古来日本では木も石も人間と同じく情を持つ存在であるとする考え方があつた。したがって、我が国に取り入れられた「木石、心を持たず」「人、木石にあらず」という句は、仏典や漢籍において持つ生そのものを否定したり、非情のものとして拒絶したりするような深刻さを持たず、修辭として利用される傾向にある。

はじめに

生老病死の苦から隔離された王宮の中で何の不自由もなく暮らしていた太子シッダールタ（薩婆悉達）が初めて死人を見たのは城西门外のことであつた。『過去現在因果経』はその時の驚きを次のように描いている（引用は『昭和新纂国訳大藏経』による）。

太子、又問はく、「何を謂つてか死と為す。」優陀夷言はく、「夫れ死と謂ふは、刀風形を解いて、神識去り、四体

〔キーワード〕 「木石、心を持たず」・「人、木石にあらず」・「草木国土悉皆成佛」・望夫石伝説・「石に精あり」

諸根、復知る所無きなり。此人の世に在るや、五欲に貪著し、錢財を愛惜し、辛苦経営、唯積聚を知るのみ、無情を識らざるに今や一旦之を捨てて死す。又父母、親戚、眷属の為に愛念せらるるも、命終の後は猶し草木の如く、恩情

の好悪、復相関せず。是の如く死は誠に哀れむべきなり。」  
 (中略) 太子、素性、恬靜難動なり。既に此語を聞き、自ら休んずること能はず、即ち微声を以て優陀夷に語るらく、「世間、乃ち復此死苦有るを、云何が中いかんに於て放逸を行じつつ、心木石の如くにして怖畏を知らざるや。」と。

「死ぬということはどういうことか」と太子は優陀夷に問うた。優陀夷は「刀風(斷末魔の苦痛)が筋骨を解体し、神識(意識)は去り、四体諸根(眼・耳・鼻・舌・身の働き)も失われる。五欲を貪り、苦勞して貯め込んできたすべてのものは死によつて無となり、死後は草木のように父母、親戚、眷屬に愛されたことも、怨惡の念もすべて無關係の存在となる。死ぬということとは誠に哀れなものである」と答えた。

仏教では死は木石のような状態になることであると説明される。『雜阿含經』にも「人身を捨てたる時、彼の身屍地に臥し丘塚に棄てらるる間は、無心なること木石のごとし」(卷二十)と見え、『仏所行讚』にも「心は枯木石に非ざるに、曾て無情を慮らざ」(厭患品)、「他の老病死を見て、自ら觀察することを知らず、是は即ち泥木の人、当に何の心にか慮有るべきや」(離欲品)、「猶憂惑を知らざるは、真に木石たり」(離欲

品)と同様の言葉が繰り返されている。すべての者は老いてゆき、死を免れることはできないものであることを知った太子の心は安らかではいられなくなつた。「人々が放恣な生活をしてゐるのは、死ぬということを知らず、その怖ろしきを『木石の如く』理解できないからであるうか」、太子には死に思いを致さず放逸に暮らす人々は死んでゐることと同じく思われたのである。

しかし、それが無明に覆われ、貪りと怒りに焼かれる世界であるとしても、そこに生きなければならぬかぎりには、木石ではない恩情を知る存在としてありたいと人々は願うものである。文学には「我が身は木石にあらず」、「人の心は木石にあらず」と敢えて言挙げする人間が描かれる。『文選』(漢・昭明太子撰)には、

家貧貨賂不足以自贖、交遊莫救、左右近親不為一言。身非木石、独与法吏為伍、深幽囹圄之中。

家は貧にして貨賂以て自ら贖ふに足らず。交遊救ふ莫く、左右近親も為に一言せず。身は木石に非ざるに、独り法吏と伍を成し、深く囹圄の中に幽せらる。

(卷四十一・司馬遷「報任少卿書」)

と見え、『遊仙窟』(唐・張文成著)にも、

鳥獸無<sub>レ</sub>情。由知<sub>レ</sub>怨<sub>レ</sub>別。心非<sub>二</sub>木石<sub>一</sub>豈忘<sub>二</sub>深恩<sub>一</sub>。

鳥獸の情無くも、由別れを怨むことを知れり。心木石に非らず、豈に深恩を忘れんや。

と見え、『白氏文集』(唐・白樂天著)にも、

生亦惑、死亦迷。尤物惑<sub>レ</sub>人忘<sub>レ</sub>不得。人非<sub>二</sub>木石<sub>一</sub>皆有<sub>レ</sub>情。不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>遇<sub>二</sub>傾城色<sub>一</sub>。

生にも亦た惑ふ、死にも亦た迷ふ。尤物、人を惑はして忘れ得ず。人、木石に非らず、皆情有<sub>レ</sub>り。傾城の色に遇はずに如かず。(卷四・新樂府・「李婦人」)

と見える(一)。

以上のように、仏教では死の状態を木石のごとしと言い、漢文学では人は木石にあらずという。いずれにせよ、木石は非情のものである。しかし、我が国においては、後述のように、少なくとも江戸時代までは木石にも情があるというアニミズムの考えが存在していたようである。したがって、「木石、心を持たず」「人、木石にあらず」という句が、どのように我が国で利用されたかは興味深いことである。

## 1 日本での受容

### a 木石、心を持たず

日本の文学において「木石には心がない」と述べられるのは、『萬葉集』巻五に見える山上憶良の「令<sub>レ</sub>反<sub>二</sub>或情歌<sub>一</sub>」(神龜五年(七二八)頃の作)に、

父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐしうつくし 世の中は かくぞことほり (中略) 穿<sub>レ</sub>沓<sub>一</sub>を 脱<sub>レ</sub>ぎ棄<sub>レ</sub>ることく 踏み脱<sub>レ</sub>ぎて 行くちふ人は 石<sub>一</sub>木<sub>一</sub>より 成<sub>レ</sub>りてし人か 汝が名のらさね (下略) (萬5・八〇〇)

とあるのが最初のようなのである。憶良の作品には漢籍仏典が多く引かれているが、小島憲之博士によると、右の歌もまた『抱朴子』(晋・葛洪著)「対俗」篇の「若<sub>レ</sub>委棄<sub>二</sub>妻子<sub>一</sub> 独<sub>レ</sub>処<sub>二</sub>山沢<sub>一</sub>、邈然断絶人理 塊然与<sub>二</sub>木石<sub>一</sub> 為<sub>レ</sub>隣<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>足<sub>二</sub>多也<sub>一</sub>」(妻子を委棄し、山沢に独処し、邈然として人理を断絶し、塊然として木石と鄰を為すが若きは多とするに足らざるなり)を踏まえたものであるという(『山上憶良の述作』『上代日本文学与中国文学(中)』所収)。同じく憶良の「日本挽歌」(神龜五年(七二八)

作)にも、

大君の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国に 泣く児なす  
慕ひ来まして 息だにも いまだ休めず 年月も いまだ  
あらねば 心ゆも 思はぬ間に うち靡き 臥しぬれ 言  
はむすべ せむすべ知らに 石木をも 問ひ放けしらず  
家ならば 形はあらむを 恨めしき 妹の命の…

(萬5・七九四)

と見える。思いがけない妻の死にどうしてよいか分らない気  
持ちを「石木をも 問ひ放けしらず」(心を持たない岩や木な  
どに問いかけてもどうにもならず)と言ったものようであ  
る。

憶良の用いた「石木」は漢語の「木石」に対する和語であ  
る。造語成分が前後逆であるのは、「日月」に対する「つき  
ひ」、「前後」に対する「うしろまえ」、「左右」に対する「みぎ  
ひだり」などと同様であるが、漢語「木石」と和語の「石木」  
とは意味あいが異なっているようである。漢語「木石」には情  
を持たないものといった意味あいがあるが、和語の「石木」は  
価値のないものといった意味あいを持っていたのではないかと  
思われる。『出雲国風土記』(天平五年〔七三三〕勘造)に、

神須佐能衰命、詔りたまひしく、「此の国は小さき国なれ  
ども、国処なり。故、吾が御名は石木には著けし〔非〕著  
木石」と詔りたまひて、  
(飯石郡・須佐の郷)

と見える「石木」はそのような意味で用いられているからであ  
る。ただ、奈良時代の古い「石木」の用例はこの一例しか見ら  
れないので確かなことは言えないが、仮にそうであれば、憶良  
の「石木」はそのことでも斬新であつたことになる。

ただし、同じ『萬葉集』には大伴家持の歌にも「何の物思  
もしない石や木になつた方がましだ」と歌つた例がある。

かくばかり恋つつあらずは石木にもならましものを物思は  
ずして  
(萬4・七二二)

しかし、この用例は天平年間(七二九—七四八)の作であつ  
て、憶良の「石木より 成りてし人か」を踏まえたものであろ  
うとされる(沢瀉久孝『萬葉集注釈』)。

上代の日本文学には「石木」の例は以上の例しか見られない  
が、平安時代以降では多くの用例を見出すことができる。以  
下、管見で見出しえた例を列記をする。文意の理解しにくいも  
のには現代語訳などを添える。

○真金だにとくといふなる五月雨に何の岩木のならる君ぞも

(能因法師集・二三)

○逢ふことのかく難ければつれもなき人の心や岩木なるらむ

(千載集12・七五七)

○ふみそむる恋路のすゑにあるものは人の心のいは木なりけり

(新勅撰集11・六八五)

○こころの月ごろ、ねんじつることをいふに、いかなる物とたえていらへもなく、寝たるさましたり。きゝくて寝たるがうちおどろくさまにて、「いづら、はや寝給へる」と言ひ笑ひて、人悪げなるまでもあれど、岩木のごとして明しつれば、つとめて、物も言はで、帰りぬ。

(かげろふ日記・中・天禄二年一月)

\*岩木のように身を固くして相手の情に應えることなく  
夜を明かして、

○「いと、うたて。いかなれば、いとかうおぼすらん。いみじう思ふ人もかばかりになりぬればおのづからゆるぶ気色もあるを、岩木よりけに靡なみきがたきは、契り遠うて、「にくし」など思ふやうあなるを。さやおぼすらん」

(源氏物語・夕霧)

○「われ、かばかり雪をわけてたづね入りたらんを、対の君

・少将など、いかばかりの岩木をつくりてか、なさけをか  
けざらん」

\*どれほどの木石のような態度を装つて、私に情けを  
けないだろうか。  
(夜の寝覚め・巻二)

○「思ひしらぬには侍らぬに、むかしながらの身ならまし  
かば、かばかりも、思ひかけぬに御覽せられましや、と思ひ  
はべる涙ばかり、のどめがたきに、せかれはべる程なさも  
心憂く、いかばかりの岩木ならば、かう思ひ知りきこえさ  
せぬやうは」

\*どれほどの木石のような女ならば、このようなありが  
たい帝のお心を思い知り申さぬということがあろう  
か。  
(夜の寝覚め・巻二)

○露ばかりをかしう疎ましき気色そへず、世に知らぬめでた  
き御さまにて、心深いいみじうもてない給ふを、いかばか  
りの石木かは見知らざらん。

\*どれほどの石や木であつても、心深いもてなしを見て  
わからないことがあろうか。(浜松中納言物語・巻四)

以上は和語「いはき」が用いられている例であり、以降は漢  
語「木石」が用いられている例である。

○男モ「イデヤ何ガセマシ。(中略)介ノ殿、何かニ迷給ハムトスラム」ト空怖クテ、木石ノ心ヲ発シテ土ヲ掘ニ、  
 見、「此ハ暑預ヲ偏ニ堀ゾ」ト思ヒテ、

(今昔物語集・二六の五)

○大場重ねて申す、先祖は誠に主君、但し昔は昔、今は今、  
 恩こそ主よ、(中略)景親は平家の御恩を蒙ること海山の如く、高く深し、恩を知らざるは木石なり。

(源平盛衰記・二〇、石橋合戦事)

○此恩徳不レ思者如ニ鬼畜木石也。

(法華経直談鈔一本)

○有レ心人、知恩・報恩ノ行不レ可ニ懈怠。内有ニ仏性、外

有ニ勝縁。タレカ是ヲ思ザラムヤ。此心ナカラン人、木石

畜類ニモ猶ヲトレリ。

(雑談集・卷二・人ノ母念レ子事)

○夫難レ受者人身。今既受たれ共、眼にさへぎる生死無常を

見ても、驚心無ければ、殆木石の如し。

(妻鏡)

○能々物を案ずるに、物の哀をしらざるは、唯木石にことな  
 らず。

(謡曲・唐舟)

○いはんや二仏の中間の衆生として、恩愛の、あはれを知ら

ざらんは、木石に異ならず。

(同右・木賊)

江戸時代には貝原益軒編『和漢古諺』(宝永三年(一七〇三)

刊)に「恩を見て恩を知らぬは鬼畜木石のごとし」という諺が見える。この諺は現在でも時折用いられているようである。

## b 人、木石にあらず

「我が身は木石にあらず」「我が心は木石にあらず」という漢籍の句を基にしたと考えられる表現は上代には見られず、平安時代から現われる。

○むかし、をとこ有りけり。女をとかくいふこと月日経にけり。いは木にしあらねば、心苦しとや思ひけん、やうやうあはれと思ひけり。

(伊勢物語 九六段)

○…さはあぶくまの あひもみで かからぬ人に かかれかしなにのいはきの 身ならねば おもふ心も いさめぬに

(かげろふ日記・上・天徳二年七月)

○人の御氣しきはしるきものなれば、見もて行ままにあはれなる御心ぎまを、いは木ならねば、おもほししる。

(源氏物語・東屋)

○泣く泣くのためひけるは「いでや、見たてまつらざりしその前ならば、いかがせん、今は絶えてあるべしともおもえず」とのたまへば、姫君聞きたまひて、さかずに岩木なら

ねば、あはれと聞きたまへり。(住吉物語・上巻)

○その観を成就するまでもこそなくとも、かやうにしりそめなば、さすがに岩木ならねば、五欲の思、やうくうすくなりて、(閑居の友・上・一九)

○誰もみな、さやうの事はみるぞかし。さすがに岩木ならねば、みるときはかきくらさるゝ事もあり。(同右・上二〇)

○諸の神明仏陀も、彼詠吟を以て、百千万端の思ひを述給ふ。入道も岩木ならねば、さすがに哀げにぞ宣ひける。(平家物語・卷二「卒塔婆流」)

○猛き武士共もさすがに岩木ならねば、皆涙を流しけり。(同右・卷十一「副将被斬」)

○武士共もさすがに岩木ならねば、各涙を流しつゝ、「なにかはくるしう候べき」とて、ゆるしたてまつる。(同右・卷十一「重衡被斬」)

○Iwaqi イワキ (岩木) 岩と木と。例、Oiyomoria gide nageba sasuga auareni vomonaretaio. (清盛岩木でなければさすがに哀れに思はれたと) Feiq. (平家) 卷一。(日葡辞書)③

○その観(引用者注―不浄観)を成就するまでこそなくと

も、かやうにしりそめなば、さすがに岩木ならねば、五欲の思、やうくうすくなりて、むかしにあらぬ心にな侍りなざるぞかし。(閑居友・一九)

○誰もみな、さやうのこと(引用者注―顔の下には髑髏があること)はみるぞかし。さすがに岩木ならねば、みるときはかきくらさるゝ事もあり。(同右・一九)

「岩木を結ばず」(人間は非情な岩や木で造つたものではないといった意)という句もある。

○車の前後に候ひける武士どもも、さすがに岩木を結ばねば、おのおの袖を濡らしける。(盛衰記・七・成親卿流罪)

○長者岩木を結ばねば哀れなりと思はざるにあらず。(私聚百因縁集・二)

以上は和語「いはき」が用いられている例である。以下は漢語「木石」が用いられている例である。

○身非木石思寄暇而撰治。

(菅家文章・九「上太政天皇、請令諸納言等共参外記状」) さまざまに、思ひ乱れて、「人木石にあらざれば、みな情あり」と、うち誦して臥したまへり。(源氏物語・蜻蛉)

○今人間に生れぬ。内に本有の仏性あり、外に諸仏の悲願あ

り。人木石にあらず、発心せばなどか成仏得脱なからん。

(曾我物語・二二・少将法門の事)

○人木石にあらねば、時にとりて、物に感ずる事なきにあらず。  
(徒然草・四一)

○永観律師ノ式ニ、「人非木石。好自発心ス」ト。此ノ言目出シ。我等本来之心、自性清浄也。実ニハ与レ仏全ク同。  
(雑談集・卷一・三学事)

○こゝをもつて、南都東大寺禪寺永観法師は「人木石にあらず、このめばをのづから発心」と申したるなり。

(宝物集・卷四)

\*永観法師の『往生講式』に「人非木石好自発心」とある。

○人木石にあらず。亀雀恩を知れりと申も理にぞ侍るめり。

(同右・卷六)

○我心イヤシウグチナリトモ、木石ノヤウニ頑愚ニハアルマイゾ。  
(玉塵・三五)

○及ばずながら我とても木石ならず。

(浮世草子・傾城禁短氣・三の四)

以降、現在に至るまで多くの用例を拾うことが出来るが、右

に掲げた江戸時代までの用例から気づかれることがある。『源氏物語』蜻蛉巻の例は『白氏文集』の「人非木石皆有情」を誦したもののようであるが、『菅家文章』に「身非木石」とあり、『かげろふ日記』に「なにのいはきの身ならねば」とあるのは『文選』の「身非木石」によつたものである。また、『玉塵』に「我心…木石ノヤウニ頑愚ニハアルマイゾ」とあるのは『遊仙窟』の「心非木石」によつたものと考えられる。したがつて、『白氏文集』『文選』『遊仙窟』それぞれの形が当初日本では用いられていたようであるが、『遊仙窟』の醍醐寺蔵古鈔本『遊仙窟』（正安二年〔一三〇〇〕の書写本を康永三年〔一三四四〕に模写したもの）では「心非木石」の「心」にヒトの振り仮名があり（江戸時代の初期無刊記本も同様である）、文和二年〔一三五三〕書写の真福寺本（貴重古典籍刊行会複製）では本文が「人」になっている（嘉慶三年〔一三八九〕書写の陽明文庫本では本文「心」で、訓は無い）したがつて、中世以降では『白氏文集』の「人、木石にあらず」の形が広く知られるようになり、この形が一般化したようである。



## 2 日本の木石観

### 2-1 「草木国土悉皆成佛」

ところで、仏典漢籍で石を無情と言う時は、木とともに「木石」という熟語で現われることが多い（真言僧の慈雲（一一七一—一八〇四）の『短編法語』に、融通が利かないものを「木頭頑石」と表現しているが、これも仏教用語であろうか。これも木と石とが対で用いられている）。日本の古典においてもまた、「石」単独で無情と言うことはほとんどない。例外的に『沙石集』（卷二・七）に、

仏菩薩ノ利益ハ、行者ノ実アル時、感応アラハレ、鐘ノ打ニ随ヒテ、音ヲイダシ、谷ノ声ニ随ヒテ、響ヲ興ガ如シ。  
金石ノ心ナキ、人ノタ、クニ依テ、猶声ヲ出ス。

と見え、浄瑠璃の「待賢門夜軍」（四）に、

思はぬ方とそひぶしは、苔のしとねに岩枕、石を抱いて寝る心地

と見えるぐらいである。前者は『周礼』春宮の「大師云、皆播之以三八音、金石革糸木匏竹」（注云「金鐘罇也、石磬也」）などが踏まえられたものであり、後者は『かげろふ日記』

の「岩木のごとして明しつれば」のように、「岩木」と言うべきものが略されて用いられたものかと思われる。とすれば、日本において石を無情のものと言うのは、仏典漢籍から木と対になった句の形から学んだ可能性が高いと思われる。

しかも、それらの句が用いられている状況は、仏典漢籍における深刻さとは微妙に異なっていることは留意される。すなわち、仏典における「木石、心を持たず」というのは、生に對する絶望的な死の状態を譬喩するものであったが、憶良の「石木より成りてし人か」「石木をも問ひ放けしらず」は情の無い者を諷る言葉として用いられており、あるいは石木にも情のあることを期待する意味あいでも用いられている。大伴家持の、

かくばかり恋つつあらずは石木にもならましものを物思はずして

という歌もまた、

かくばかり恋つつあらずは高山の磐根しまきて死なましものを

吾妹子に恋ひつつあらずは秋萩の散りぬる花にあらましのを

かくばかり恋つつあらずは朝に日に妹が踏むらむ土にあら

（萬2・110）

ましを

(萬口・二六九三)

などの恋の辛さを表現する定型に当てはめたものにすぎない。平安時代以降の例も「つれもなき人の心や岩木なるらむ」(千載集)や「恩を知らざるは木石なり」(源平盛衰記)のように、受けた誠意や恩義に対して何も感じない人を責めるような場合に用いられており、漢籍での用例のように、死ぬまでは情を持った人間として生きていきたいという願いを籠めたものではない(4)。「木石ノ心ヲ発シテ」子どもを土に埋めた『今昔物語集』の男も、「心ノ迷ケルママニ」慌ててその場を逃げさり、事が露見すると「人ヨリ勝レテ泣」き騒いだのであった。

日本において「木石、心を持たず」「人、木石にあらず」という句が、仏典や漢籍における深刻な内容を含まずに用いられるのは、日本在来の岩石観に因るものではないかと思われ

る。仏教の教義については筆者は不勉強であるが、『北本涅槃經』(卷三十一)「高貴徳王菩薩品」、卷二十七「師子吼菩薩品」などに「一切衆生悉有<sub>二</sub>仏性<sub>一</sub>」とあるように、すべての「衆生」(生ある人や動物)は「仏性」(仏陀の本性≡真如)を持つ

存在であり、衆生のみが成仏するというのが仏教本来の考え方であるが、唐代には衆生だけでなく草木も成仏できるとする考え方が生まれ、特に天台宗の湛然(七一―七八二)の草木成仏説は大きな影響を与えたようである。日本でも最澄(七六七―八三二)『決権実論』に、

問。有性<sub>レ</sub>与<sub>レ</sub>無性<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>皆成<sub>レ</sub>仏道<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>当<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>成不成<sub>レ</sub>耶。

答。有性者得<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>仏道<sub>一</sub>。無性者不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>仏道<sub>一</sub>也。

難曰。違<sub>レ</sub>大円覚修多羅了義經、有性無性皆成<sub>レ</sub>仏道<sub>一</sub>。

という問答が見える。最澄自身はその考え方を否定しているが、空海(七七四―八三七)の『卍字義』には、

遍空の諸仏、驚覺開示したまへば、乃ち化城より起ち、宝所に廻趣す。草木また成ず。何ぞ況んや有情をや。

法身の三密は織芥に入れども<sub>レ</sub>迂<sub>レ</sub>からず。大虚に巨れども<sub>レ</sub>寛<sub>レ</sub>からず。瓦石草木を<sub>レ</sub>簡<sub>レ</sub>ばず。人天鬼畜を<sub>レ</sub>扱<sub>レ</sub>はず。何処々に<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>遍<sub>レ</sub>ぜざる。何物を<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>扱<sub>レ</sub>せざる。故に等持と名づく。是を平等の実義と名づく。

とあり、『性霊集』には、

更に天下に与して新たならしめよ。然れば則ち、木石も

恩を知り、人鬼も感激せむ。(四、請為救僧中環罪表)

と見え、無情のものを有情のものと同等に見る考えを採っている。

こうした草木もまた成仏するという考え方が生まれてくるのはアニミズムの信仰が影響しているものと思われる。

菅原文時(菅三品 八九五—九七八)の詩に、

聖王膺<sub>レ</sub>籙之六載。承平開<sub>レ</sub>元之五年。朝野清平風雲律呂。

〔仁沢潤「木石」。文教被<sub>二</sub>乎華夷<sub>一</sub>。〕

(七言。北堂文選竟宴、各詠<sub>レ</sub>句、得<sub>三</sub>遠念<sub>一</sub>賢士風)

聖王(朱雀天皇)即位の六年、即ち承平元年、天下清平にして風雨自ら調ひ、仁沢は木石にも及び、文教は内外に被れり。

などが見え、中国においても『臣軌』(唐・則天武后〔在位

六九〇—七〇五)撰「良將軍」に、

是以古之將者、貴得<sub>二</sub>衆心<sub>一</sub>。言、以<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>衆心<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>貴也

以<sub>レ</sub>情親<sub>レ</sub>之、則木石知<sub>レ</sub>感、況以<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其死力<sub>一</sub>乎。言、將

若能以<sub>レ</sub>情親<sub>二</sub>其士卒<sub>一</sub>、則雖<sub>レ</sub>曰<sub>二</sub>木石<sub>一</sub>、猶感<sub>レ</sub>応<sub>レ</sub>矣。況以<sub>二</sub>

仁愛<sub>一</sub>卒<sub>レ</sub>下、而不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其死力<sub>一</sub>乎、言<sub>二</sub>其必得<sub>レ</sub>之<sub>一</sub>矣

ここを以て古への將は衆心を得るを貴ぶ。情を以てこれ

に親しむときは、則ち木石も感を知る。況んや、愛を以

て下を率ゐてその死力を得ざらんや。と見える。

さらに、この木石すらも恩を知るといった考え方が、ヨーロッパでも見られるのは⑤、草木成仏説といった教義の問題と関わらない民間の自然信仰に基づくものと考えられるからである。

いずれにせよ、草木もまた成仏できるという考え方が日本では受け入れられやすかつたことは、「草木国土悉皆成佛」「草木国土悉皆浄土」という定型化した句で知られる天台本覚思想が日本に成立したことで確かである。衆生と木石とを区別しない天台本覚思想は安然(八四一—?)、良源(九一二—九八五)、源信(九七四—一〇一七)などによって発展してきた思想であるが、伝源信著『真如觀』に「一切ノ非情、草木・山河・大海・虚空、皆真如ノ外ノ物ニアラズ」「自他身一切ノ有情皆ナ真如ナレバ則仏也。サレバ草木・瓦礫・山河・大地・大海・虚空、皆是真如ナレバ、仏ニアラザル物ナシ」とあり、親鸞の『唯信鈔文意』にも「仏性すなはち如来なり。この如来徹塵世界にみちみちてまします。すなはち、一切群生海のところにみちみちたまへるなり。草木国土ごとごとくみな成仏すととけ

り」とあることも有名である。平安時代以降の文学作品には、この天台本覚思想の影響を受けたものと思われる例を見ることが出来る。

いみじき岩木鬼の心なりとも聞ては涙おとさざらんや。

(宇津保物語・楼の上)

なほざりのあきはかなる一言をのたまふに、なさけくしく、あはれにこ深き景色をそへ給ふ人がらに、まして心のかぎりつくし給ふは、いみじからんなにの岩木もなびきたちぬべきに(どんな堅固な岩木でも心動かされそうなので)

(夜の寝覚・巻一)

岩木にも物の心はありといへばさぞなわかれの秋はかなし

き (夫木集・巻15・光俊)

## 2-2 「木石心なしとは申せども」

注目したいのは「木石に情なし」という考え方を正面から否定する文章が、やがて日本では現れることである。江戸時代の謡曲『殺傷石』に「木石心なしとは申せども」という句がある。

「殺傷石」とは容顔美麗の女の執心が石となり、人間ばかり

か鳥類畜類までも触ると絶命する怖ろしい石であるが、謡曲では僧、玄能が、

木石心なしとは申せども、草木国土悉皆浄土と聞く時は、

本より仏体具足せり。況んや衣鉢を授くるならば、成仏疑

あるべからず、

と石に花を手向け、焼香し、仏事をなし、

汝元來殺生石。問ふ石靈。何れの処より来り、今生かくの如くなる。急々に去れ去れ。自今以後汝を成仏せしめ。仏

体真如の善心となさん。撰取せよ。

と呼びかけると、「石に精あり、水に音あり、風は大虚に渡」

り、石が二つに割れて石魂(野狐)が現われ、「今逢ひがたき、

御法を受けて此後悪事をいたす事、あるべらずと御僧に、約束

堅き、石となつて、約束堅き、石となつて、鬼神の姿は失せに

けり」ということになる。文中に見える「石に精あり、水に音

あり」というのは、万物はみな精を宿しているという意味であるが、「河水」(謡曲)にも見え、当時はこうした諺もあつたよ

うである<sup>6)</sup>。斎藤彦麻呂の「傍廂」(嘉永六年(一八五三)自

序)には、工匠の手で器となつたものは死物であるが、生のま

まの草木砂石はすべて有情のものであるとする考え方が展開さ

れている。

人は更なり。鳥獸虫魚を有情といひ、草木砂石を非情といへるは、いみじきひがごとなり。利鈍巧拙の差別はあれど、有情ならざるはなし。鳥獸虫魚はさどくして、生をむさぼり、死をのがれんとす。草木砂石はにぶくして、さる事なければ、広き処にては、枝朶えだをのばへ、狭き庭にては、杪こぶを狭めてかままりながらおひたち、蔓草つたの類はするべきたよりをたづねて、のびゆくこと非情のわざならんや。砂石は今ときは鈍く拙きものなれど、年を経て、強大になり行く事、非情のわざにあらず。ただ、金、石、木、竹の類、工匠の手にて器となりたるは、死物なれば、これらこそ、非情の物にはあれ。生のまゝなるは、皆有情なり。

(「有情非情」)

## 2—3 望夫石伝説

帰らぬ人を待つて石になつたという話が中国朝鮮日本にはある。日本では松浦佐用姫の話がよく知られている。初出は『曾我物語』に「松浦佐用姫がひれふりし姿は石になりにける」

(巻六) かと思われる。『建礼門院右京大夫集』(鎌倉時代初期

成)に「往時恋」と題する歌に、

あはれしりてたれかたづねむつれもなき人を恋ひわび岩となるとも

とあるのも、松浦佐用姫伝説を踏まえたものであろうか。ただし、『萬葉集』巻五また仙覚抄に引く『肥前国風土記』に見える松浦佐用姫は袖を振るだけで石には化していない。あるいは、中国の武昌北山の上にある望夫石の話が取り入れられて石に化したという伝説に発展したのであろうか。武昌北山の上にある望夫石のことは、永万二年(一一六六)「中宮亮重家卿家歌合」における俊成判詞に、

この石となることは、若し望夫石と申事にやあらん。そのかみおろく見侍りしかば、武昌北山上有望夫石其状如人云々。昔貞婦ありけり。その男遠き国へゆきけり。別を惜しみてかの山の上に立てりて、夫を見送りけるが化して立てる石になりにけり云々。

とあり(七)、『十訓抄』(建長四年(一一五二)成)にも、

昔、夫婦相思ひて住みけり。夫、軍にしたがひて遠く行くに、その妻小さき子を具して、武昌の北の山まで送る。夫の行くを見て悲しびたてり。夫かへらずなりぬ。妻その子

を負ひて立ちながら死ぬるに、化して石となれり。その姿

人の子を負ひて立てるがごとし。これによりて、この山を

望夫山と名づけ、その石を望夫石といへり。くはしくは

『幽明録』に見えたり。「しらら」といふ物がたりに「しら

らの姫君、夫の少将の迎にこんと契りて、おそかりしを待

つとて、よめる」とあるはこの心なり。

たのめつつきがたき人待つほどに石にわが身ぞなりは

てぬべき。

(第16)

と見え、広く知られていたようである。朝鮮の『春香伝』(李

朝末期成)に見えるものも同様に武昌北山の上にある望夫石を

踏まえたものであろうと言う(8)。

望夫石伝説は主人公を変えつつ各地に伝承されていったよう

である(9)。江戸時代の木内石亭の『雲根志』によると、三河

国赤坂の上宮路山上にも望夫石(三編卷三奇怪類「望夫石」)

もあり、さらに、

相州大磯の駅或寺の什ものにある。伝言、むかし此所に虎

といふ遊女ありて曾我十郎祐成に通ず。世の人の耳にとゞ

まる貞女なり。祐成死て後、虎別れをかなしみ一の大石と

成れり。よつてとらが石と号し当寺におさむ。

(前篇卷三変化類「虎兇石」)

という「虎兇石」もある。

日本にはそうした望夫石系統のものだけでなく、人が石に化

したという言い伝えが多く見られる。『雲根志』には、

大磯の虎が石は虎が霊石と化し、信州姥捨山には姥が霊石

と化し、遠州掛川の嫁が霊石、姑が霊石、伊賀国名張郡中

知山の夜泣石、同国阿波郡夙村の夜泣石、此類の事あげて

算ふるにいとまなし。

(三編卷三奇怪類「夜泣石」)

とあり、石上堅『石の伝説』(雪華社、昭和三十八年(一九六

三)刊)にも多くの例が紹介されている。例えば大分県直入郡

都野村の「女郎岩」には、

平家滅亡の時、一人の女臍しよらうが、この村に逃れていたが、一

人の武士に捕えられ、責め殺されてしまう。その怨みで石

になった。この石に触ると、大雨が降ると云い、またこの

石を他に移すと、もとの場所に戻ってしまう。

(失恋した石)

という言い伝えが残る。

### 3 「石とならまほしき」

ところで、石上氏は「およそは恨み悲しみの揚句、石になる」ものであり、「心あたたまるもの」は少ないと言う。「心あたたまるもの」とは、例えば長野県南佐久郡田口邑にある「爺婆石」の、

昔、旅に疲れた六部夫婦が、山崎に登って、日向ぼっこをして、佐久を眺めているうちに、うつらうつらと、石になつてしまった。今は爺石だけになり、笠をあみだに被つてゐるような格好をしている。婆石は、先年割られたと。

といったものである。少ないものの、このような「心あたたまる」伝説が日本にあることに注目したい。日本では石になることはすべての人間性を喪失してしまう恐ろしいことでは必ずしもなかったのではないかと思われる。感情そのものが無いことを「非情」と言い、情を持ちつつも敢えて喜怒哀楽を表わさないことを「無情」と言い分けるとすれば、日本の石は「非情」の存在ではなく「無情」の存在として捉えられているのではないかと思われるのである。

現代人の我々もまた無情の石になりたいと思うときがある。

薄田泣菫は「沙弥がうたへる歌」〔『ゆく春』明治三十四年（一九〇一）所収〕に、

今鐘楼に上り来て／遠く浮世を望めば／百里途もつくる方  
／春はかなく落ちんとす。ああ若きは酒くみて／甘き夢に  
興がるを／独り冷えし堂に入り／破れしみ経や読むべき。  
悪の神靈わざいにわれを石とせよ……／きは永劫朽ちもせで  
／春恋石と名をや得め。

と歌い、中島敦（一九〇九—一九四五）の『かめれおん日記』（昭和十一年（一九三六）成）にも、

外に向つて展かれた器関を凡て閉ぢ、まるで掘上げられた  
冬の球根類のやうにならうとした。それに触れると、どの  
ような外からの愛情も、途端に冷たい水滴となつて凍りつ  
くやうな・石にならうと、私は思つた。

我はもや石とならむず 石となりて 冷たき海を沈み  
行かばや

水雨降り狐火燃えむ 冬の夜に われ石となる黒き小

石に

眼瞑つれば 氷の上を風が吹く 我は石となりて転び

て行くを

腐れたる魚のまなこは 光なし 石となる日を待ちて

我がゐる

とあり、遺稿の「石とならまほしき夜の歌 八首」には、

石となれ石は怖れも苦しみも憤りもなけむはや石となれ

という歌も見える。

石はキリスト教では精神スピリットも魂ソウルも持たない存在であり、現代科学でも生長することもなく生まれることも死ぬこともない無機物である。そうした考え方を理解しながらも、石になつて永遠の命を得、怖れも苦しみもない心の平安を得たいと願う日本人の心情は西洋人には理解できないことであろう。

[注]

(1) 『宋書』呉喜伝にも「応に死に入るべき人、已に縁りて活を得、唯活を得たるのみに非ず、又復意の如し。人は木石に非ざれば、何ぞ能く、感ぜざらん」とあり、南朝宋の鮑照の詩「擬行路難」にも「人生また命あり。安んぞ能く行きて嘆じ、また座して愁ふ。酒を酌みて以て自ら寛くす。杯を挙げて断絶せむ。路は難しと歌ふを。心木石に非

ず、豈感無からんや。声を吞みて躑躅し敢えて言はず」と見える。

(2) 後世には漢語「木石」が価値のないものの比喩として用いられた珍しい例がある。和習の例として捉えておきたい。

仏ハ無相ノ法身トテ、悟リフカキ行者ガ、観念シテ深キ利益アリ。重々ノ機ニ分々ノ利益ヲホドコシ給フ。ヲロカナル者ノ敬フ心ナクテ木石ノ如ク思ヘルニハ、只木石ノ如シ。

〔雑談集〕第五卷・上人事

(3) 土井忠生・森田武・長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店 一九八〇刊）に「Feige (平家) の原文には Qiyomori mo iuqi de nagercha、とあるから、ここも Qiyomorino iuqi de の誤植であろう」とある。

(4) 後世にも次のような例も現われる。

されども人は木石にあらざ。木か石ならば用て損ずることもあるべきなれども、人の身体は働くほど強くなり、人の精神は用るほど達者になるものなれば、

(福沢諭吉『訓蒙窮理図解』序)

夫れ人は木石にあらざ、誰か色情なからん。人は禽獸



にあらず、誰か名譽心なからん。(正岡子規『読書弁』)  
(5) 例えばドイツ・ロマン派の詩人ノバールス(一七七一—  
一八〇二)の『青い花』(青山隆夫訳、岩波文庫 p.200)  
にも次のように見える。

石くれもまた歡樂びに酔い、  
聖なる母の足もとに、  
身をこごめうずくまる。

石ですら敬虔にぬかずくものを、  
人として聖母のために泣き、  
血を流さぬものがあるうか。

(6) 無住の『雑談集』(嘉元三年〔一三〇五〕成)にも『凡  
有<sup>リ</sup>心者ハ、皆本覚ノ性、天然<sup>チ</sup>タル故ニ、自然<sup>ジ</sup>ノ智恵<sup>チ</sup>、  
分々<sup>ニ</sup>具<sup>ヘ</sup>タリ。非情<sup>ヒシヤク</sup>猶有<sup>リ</sup>精<sup>ヲ</sup>。謂<sup>イハレ</sup>鞫<sup>ク</sup>ノ精ハ猿ノ形也ト  
云ヘリ。況有情<sup>イハシヤ</sup>ヲヤ」とある。

(7) 同年の『経盛卿家歌合』における清輔判もほぼ同様の内  
容である。

(8) 許南麒訳『春香伝』(岩波文庫)に「石でも望夫石は、  
千万年を経るとても、ただの石ならむとせず」(p.10)と  
あり、許氏の注に「望夫石に関するエピソードは朝鮮内に

も数多くあり、古詩にも『井邑詞』などがある。ここの望  
夫石はどうも中国武昌の北山にあるというそれらしい。王  
建の『望夫石』という詩に曰く、「望夫処江悠悠、化為石  
不回頭、山頭日日風和雨、行人婦來石応語。」とある。

(9) 石亭は『大明一統志』に「宋の太平府城の望夫石」、『輿  
地志』に「南陵県の女觀山の望夫石」とあるのを紹介し、  
「和漢同日の談なり」と言う(『雲根志』三編卷三奇怪類  
「望夫石」)。

